

新版

日本十進分類法の 成立と展開

日本の図書館を支えた100年の道程

藤倉 恵一

Keiichi Fujikura

樹村房

はじめに

現在、日本の大多数の図書館で用いられている日本十進分類法（Nippon Decimal Classification：NDC）は、1929（昭和4）年8月25日、図書館用品専門店である間宮商店から刊行された。編者はもり・きよし（森清、1906-1990）で、戦後は日本図書館協会分類委員会によって維持・改訂されている。

現代の図書館情報学関連のテキスト等において、NDCの成立経緯について言及されているのはおおむね、上のような内容である。もちろん、もっと詳細に書かれているものもあるが、経緯の要点を整理すればこのような表現で十分事実を伝えているともいえる。しかし、これを注意深く読めば、いくつかの疑問が生じるであろう。例えば――

- もり・きよしとは何者か。

上の文をよく見れば、1906年に生まれたもりが1929年にNDCを刊行したということは、当時まだ23歳だったと逆算できる。そのような若い著者がなぜ、100年にわたって使われ続ける分類表を作りえたのか。

- もり以外に分類を作る者はいなかったのか。

NDCが刊行されたときに、他に国内に比較・対抗しうる分類は存在していなかったのか。存在していたのであれば、NDCはそれらに対してそれほど優位に立つものだったのか。そして若い著者が本当に他の分類に比肩しうるものを作ることができたのか。

- 戦後、日本図書館協会が改訂を継承したのはなぜか。

現在の図書館で広く用いられていることと、図書館協会が維持改訂していることは無関係ではないだろうが、では、なぜ改訂を継承することになったのか。戦後、もりとはどのような関係を持っていたのか。

これらはいずれも、少し調べればわかることではあろう。

もりが間宮商店の社員であったこと。雇用主の間宮不二雄がパトロンとなっていた青年図書館員連盟という後ろ盾があって、もりが国内外の多くの分類法や理論に接して得た知見がNDCの成立につながったこと。そして、戦後日本の図書館界復興・再編の過程で、国立国会図書館をはじめ標準分類法として

NDC が採用されたことや、それを支えるには、もり個人ではなく「組織」による維持改訂が求められたこと。これらが今日の NDC につながっているのである、というくらいの情報には整理できよう。

とはいえ、当然ながらこれらの出来事はすべてが単純化できるものではなく、「間宮商店のもり・きよし」がなぜ NDC を作ったのか、戦後どうして、どのように NDC が採用されたのか、ということまで調べようとするのはなかなか困難といえる。

前著でも書いたが、筆者の本来の立場は大学図書館員である。奉職してほどなく、私立大学図書館協会の分類研究分科会に入会し、2004 年から 12 年間にわたって同会の代表を務めた。その過程で NDC に対する意見を日本図書館協会分類委員会に呈したことが契機となって、分類委員会の末席として NDC10 版の改訂にも携わるようになった。

他方、趣味的な古書収集の過程から NDC の古い版や分類関係書を入手していく中で、関係者間の献呈本などの希書などが混ざり始めた。それを機に分類史、とりわけ NDC の歴史に興味を抱くようになり、NDC の維持改訂に一定の責任をもつ立場とも相まって、研究テーマに挙げるようになった。

2012 年より NDC 史の研究を手がけた。やがて株式会社樹村房の大塚栄一社長から打診をいただいて、戦前期 NDC に対する当時の集大成として『日本十進分類法の成立と展開：日本の「標準」への道程 1928-1949』(以下「前著」)を上梓する機会を得た。しかしながら、前著の範囲は基本的に戦前期にとどまっていたため、戦後の NDC に対する研究の機会は常に窺い続けていた。

そして、前著を含む研究成果をもとに大学院博士後期課程に進み、2024 年、主に新訂 9 版までの NDC 史について博士論文『日本十進分類法の展開に関する歴史的研究』にまとめあげた。この論文には、新訂 10 版改訂の経緯も含んではいるが、改訂当時の筆者の立場が分類委員会側と分類研究分科会側の双方の面から関わる当事者であったことから、この時代の出来事の多くを「客観的な研究対象」として博士論文に含むことは避けていた。

また、博士課程での研究以外にも、前著の発行後数年にわたって戦前 NDC に関する研究発表の機会が幾度かあった。その過程で、前著の執筆時に調査が及ばなかった部分の発見や、推定部分だったところの確定、あるいは調査不足

による見落としのみならず、単なる正誤表による修正ではとどまらない瑕疵や不備も見つかった。

樹村房から本書の刊行について打診を受けた当初、本書を前著の「続編」とするか「増補」とすべきか、検討の要点となった。そして相談の結果、単に「戦後」のみを1冊にまとめるのではなく、前著刊行後の調査研究で判明したことや、先に述べたような前著の補正をも含んだ「NDC 全体の通史」として、より完成度を高めた全面的な増補改訂を目指すことにした。

その一方、紙幅の関係で前著第Ⅱ部「日本十進分類法の変遷」すなわち分類表構造の比較検証についての記載の大部分は見送ることにし、全体としてはNDCの発行・改訂とそれに関する周囲の動静を本書の対象として、分類体系としての変遷は分量を減じることとした。

したがって本書は前著と本書名は共通してはいるものの、ほぼ全面的に改稿した増補でありつつ、歴史的記述に特化した「別の著作」となったことをおことわりしておく。

本来ならば副題のとおり、真にNDCの「100周年」となる2029年まで本書の刊行を待つことも考えたが、まずは本書を手にも100年を迎え、次の世代のNDCを考察するための一冊とできれば幸甚である。

本書の構成

本書は、前著『日本十進分類法の成立と展開：日本の「標準」への道程 1928-1949』（2018年、樹村房）の第Ⅰ部「日本十進分類法の成立と展開」（同書 p.3-154）および博士論文『日本十進分類法の展開に関する歴史的研究』（2024年、筑波大学）を核として、前著第Ⅱ部「日本十進分類法の変遷」（同書 p.157-282）の一部と、論文「加藤宗厚と日本十進分類法標準化をめぐる検討」（2022年、『図書館文化史研究』39号）などの内容を一部加味した上で、全面的に改稿・再構成したものである。

前著第Ⅰ部の構成は「館界・人物・団体の動静」「版ごとの改訂やその特徴」「批判や批評」というトピックによって節を分けており、第Ⅱ部において分類法の構造各部を検証考察し、各版に対する記述を経緯と内容それぞれに分けていたが、本書ではこの構造の考察部分を前著より簡略化して本文に繰り入れた。さらに原則として、本文の記述においてはできるだけ「時系列の順」に近づけるように各章・節を再構成している（トピックの錯綜が著しい一部の時期や、組織・人物の経歴などを除く）。

本書は全6章で構成され、それらは①NDC以前、②戦前（間宮商店時代）、③戦後（日本図書館協会時代）の3部に大別できる。

第1章では、NDC成立前史として西洋近代図書分類法の概略史、そして主に明治時代以降の日本の分類史・事情を挙げる。また、原編者もり・きよしと支援者間宮不二雄、そして周辺人物との出会いやその経緯については、本章に1節を設けた。

第2章および第3章は戦前期のNDCを対象とする。第2章ではNDC刊行前に雑誌に発表された原案と、第1版およびその刊行後までを対象とし、第2版から続く戦前NDCについては第3章に分けた。なお、時系列上は戦後に刊行された縮刷諸版についても、その内容や刊行の経緯からこの第3章に含む。

第4章・第5章および第6章は戦後のNDCを対象とする。第4章では標準分類としてNDCが検討される過程を、第5章ではその後刊行された新訂6～8版をそれぞれ対象とし、もりの分類委員会引退後から現在に至るまでのNDC

についてを第6章とした。

また各章の合間には、本文に含むことが難しかった「筆者個人の視点」によるNDC史研究の余録を「コラム」として載せた。これはできるだけ前著から刷新している。

巻末には、関連年表、NDC各版の第2次区分表、参考・関連文献一覧、索引を設けた。

年表は、本書で採りあげた主要な出来事や、人物の履歴について収録した。

NDCの第2次区分表は分類表のアウトラインを示す水準であり、体系の変遷は第3次区分以下まで見ないと改訂の変遷を把握しがたい箇所もあるが、紙幅の都合もあって、第3次区分表は割愛する。これらのうち、NDC原案(1928年)から第5版(1942年)までのものは前著第Ⅱ部に掲載しているので、そちらを参考にされたい。

また、本書では前著を継承し、DDCをはじめ各種の分類のアウトラインについてはできるだけ掲載して、NDC第2次区分との比較ができるようにした。

そして各種のデータ版NDCのサンプルとして、新訂8版以降作成された機械可読版NDCであるMRDF(Machine Readable Data File)と、リンクトデータ形式の試行版であるNDC-LDおよび公開されたNDCデータについては、その一部分を抜粋掲載した。

文献一覧の扱いについては次項で詳述する。

事項索引は、NDC以外の分類法や関連文献名、組織名等を収録した。人名索引は姓の順、同姓内では名の順に排列した。

和暦の表記について

本書においては、書誌事項や引用文を除いて原則として西暦を使用する。ただし、①NDCや重要文献の刊行時期や関連人物の生没年など、重要な出来事のあった年、②章・節内で最初に言及された年および改元後の最初に言及された年、③その他必要な箇所においては、西暦に続けて括弧で和暦を補記する。

参考・関連文献一覧と脚注について

本書の執筆にあたってはその性質上、多くの文献を参照している。そのため、文献一覧と注を使い分けている。

参考・関連文献一覧は本文中で直接参照・引用したもののほか、執筆にあ

たって参考にした文献も含むが、通常の図書や論文における文献リストと異なり、まず文献の性質・主題においてカテゴリを分け（例：「C 図書館史、分類史（総論または主に国外事情に関する文献）」）、おおむね発表順となるように並べた上で文献番号（例：c2 など）を付した。

注は、本文での当該箇所に対する出典の参照が容易になるようページごとの脚注とし、文献を参照している注については、文献番号と著者等（略記あり）、文献名（副題部分や、前掲のものは省略あり）を記載する。また、引用文の出典については、当該文献のページを参照する。

• 参考・関連文献の例：

c2 : [Dewey, Melvil] “A classification and subject index for cataloguing and arranging the books and pamphlets of a library” [Melvil Dewey], 1876, 42p.

• 脚注の例：

6 文献 c2 : Dewey “A classification and subject index for cataloguing and arranging the books and pamphlets of a library” (1876).

9 文献 c2 : Dewey 前掲 6: p.[3] より（藤倉訳）.

引用文の記述および新字／旧字・異体字の扱いについて

引用文・参考文献その他書誌事項の記述においては、できる限り原典に準じた文字を使用する。記述に際しては、Unicode での記述が可能な範囲で原典に近い表記・文字での転記を心がけるが、一部の文字は現用あるいは常用の表記を用いる。ただし、微細な違いによる異体字、例えば戦前の『日本十進分類法』の「進」は二点之繞で「進」と表記されているものや、「情」「述」の旧字体「情」「述」などは Unicode を指定した表記ができないため、現用・常用の表記を用いる。

和文文献は原則として参照可能な一次資料に拠ったが、一部の文献は再録されたものを底本としたものもある。引用文については読みやすさの点からすべて新字体に置換・表記することも考えたが、旧かなづかいの文章やカタカナ表記のものをどうするか、また送り仮名の扱いなど問題がさまざま派生することと、極力同一性を保持したいと考え、先に述べたように Unicode で表現できる範囲においてできる限りの再現を試みた。

ただし戦前の縦書き文でしばしば見られた、繰り返しを表す踊り字（くの字点）は横書きになじまないため、適切な文字に置換し、脚注において踊り字で記されていたことを補記する。句読点についても同様に、原典を踏襲する。したがって本文においては「,」「。」を使用するが、引用部においては「,」や「.」が含まれることがある。また、原典やその影印において判読困難な箇所がある場合は、推定により表記・補記する。

欧文文献の場合、翻訳書からの引用であれば原則として訳文を引用する。翻訳が刊行されていない場合はまず原文を示し、第三者による訳文があればそれを続け、ないものは筆者による訳文を用いる。いずれの場合も訳文については脚注で出典を示す。

引用文における段落冒頭の一字下げは、主に視認上の理由から原則として再現しないが、箇条書きや番号を付した引用部の行頭位置は原典の再現に努めた。また、引用文の原典における活字の大小は引用にあたっては再現しないが、原典において強調のためにゴシック体や明らかな太字、傍点、下線などが用いられている場合はそれを踏襲する。

誤字については、前後の状況から見て明らかな場合は修正しているが、誤字か意図的か疑わしいもの等はそのまま転記している。これらとは別に、引用文中で特に強調が必要な箇所に筆者が下線を付す場合がある。このように、引用において誤字が疑われる箇所への対応や、引用文中での下線の使用については、本文の当該引用部の末尾または脚注において注記する。

分類表の引用は、レイアウトやインデント等を含め原典の再現に努めたが、視認性や他の分類体系との比較などを目的として、漢数字からアラビア数字への置換などを行ったものがある（例：五二〇→520）。また、項目名辞の表記などは、実用を目的としたものではないので、読みづらいものになっているかもしれない点をご容赦いただきたい。

また、一部の外国の分類体系については、原典からではなく村島靖雄『圖書分類概論』（1932年・文献c18）や文部省『圖書分類法關係資料』（1935年・文献c20）を底本として引用したものがある。これは、当時の国内分類研究者の多くが参照した資料であるため、その表現を優先した。

書名・文献名等について

書名・雑誌名については、原則として和文文献は二重鉤括弧『』，欧文文献はダブルクォーテーション“ ”で囲み，可能な範囲で，その原典に記載された字体を優先する（例：『圖研究』，“Library Journal”）。ただし，発行時期の違いにより文字表記が変わった媒体（例：『圖書館雜誌』と『図書館雑誌』）など，本文中で繰り返し言及される場合は新字体での表記で統一する（引用・参考文献の書誌記述を除く）。また，『図書館雑誌』『学校図書館の手引』など特定の資料名が同じ節・項内で頻出する場合は，『雑誌』『手引』のように略記することがある。

分類および論文・記事名については，原則として和文・欧文とも鉤括弧「」に記載し，欧文文献は原題に加え丸括弧（）で筆者による訳題を付記する。

なお，項目見出しに文献名を用いる場合は視認性を考慮し，旧字体および旧仮名遣いは新字体，かな表記を原則とし，NDC に用いられた省略記号のピリオドも省略した（例：「光慶圖分類法ノ變更ニヨリ N.D.C. ノ批判ニ及ブ」→「光慶図書館分類法の変更により NDC の批判に及ぶ」）。

人名および組織・団体名について

日本人名および東洋人名については，引用文中や参考文献の書誌記述を除き，表記は主として日本図書館文化史研究会編『図書館人物事典』（2017 年）に拠り，新字体での表記を優先する（例：「衛藤利夫」→「衛藤利夫」，「和田萬吉」→「和田万吉」）が，『図書館人物事典』の表記に倣う例もある（例：「戸澤信義」←「戸沢信義」）。また，判明しているものについては原則として初出時に生没年を括弧で付記する。ただし森清など一部の主要人物は，その人物の来歴等について詳細に言及している部分において示す。

NDC の原編者もり・きよし（森清，森清）にはいくつかの筆名があり，1950 年代以降は特に「もり・きよし」「もりきよし」を主に用いていた。本書では一貫性をもたせるため，本編では原則として「森清」「森」と表記する。ただし，引用文・参考文献の書誌記述では原典の表記による。

西洋人名については，原則として姓のみの表記を基本とし，同一人に対してさまざまな表記が用いられている場合，日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典』第 5 版（2020 年）または，より慣用的に用いられる表記を優先し，初出時に欧文表記と生没年を括弧で付記する。

和洋それぞれの人名の引用にあたり、引用文中では出典どおりの表記を使用するが、混乱を避けるため、必要に応じて引用の前後付近または脚注において、本書において統一して用いる表記も示す。

人物の所属・身分については原則としてその人物が言及される時点の典拠をもとに記述したが、必要に応じて事典類や雑誌記事（特に『図書館雑誌』人事消息欄など）、『官報』などをもとに補記した。

組織・団体の名称は人名・書名における扱いに準じ、本文中では原則として新字体、引用文および参考文献の書誌記述においては出典どおりの文字を用いる。図書館関連組織名の省略形は類型化すると、①英語名称の頭文字（例：JLA, LYL）、②日本語名称を口語的に省略したもの（例：日図協、青連）、③一般名詞として省略したもの（例：協会、連盟）とに分けることができるが、本書においては文脈と使用頻度、他の文献での使用例などを考慮しつつ、原則として③→②→①の優先順位のもとに適宜略記・略称を使用する。特に頻出する上、他団体との混同がそれほど考慮されない日本図書館協会、青年図書館員連盟については「協会」「連盟」の略称を主に使用する。

分類法の名称および関係用語について

『日本十進分類法（Nippon Decimal Classification）』の略称である「NDC」は刊行当初からおよそ1950年代頃までの間、「N.D.C.」というように省略を示すペリオドを、縦書き原稿においては「N・D・C」のようにナカグロをそれぞれ介して略記されたが、本書では引用部や書誌事項を除き、今日慣用される「NDC」の表記を統一して用いる。

戦前NDCの版表示は、正式には「訂正増補第〇版」と記述されているが、文脈によって使い分け、本文中では原則として単に「第〇版」「〇版」のように略記する。

また戦後、日本図書館研究会の戸澤信義が間宮から5版の再版を委託されて出版した縮刷版については、今日のNDC序文における表記（抄録6版・縮刷7版・縮刷8版）を使用する。ただし、これら三つの版を包括して扱うときは「縮刷6～8版」「縮刷諸版」のように表記する。

そして、日本図書館協会から出版されたNDC各版は、この縮刷6～8版との混同を避ける意味もあり版次に「新訂」の語を冠している。文脈により使い

分けるが、本文中では原則として略記し、「○版」「新訂○版」と表記する。

また、デューイの『十進分類法 (Decimal Classification)』は改訂のたび数度にわたって本書名・副書名やその綴りが変化しており、またその略称も NDC と同様に特に 1960～1970 年代頃までは「D.C.」「DC」のように略記されたが、本書では特に必要がない限り、デューイ十進分類法：Dewey Decimal Classification の略記として今日慣用されている「DDC」の表記を統一的に用い、その版表示も NDC 同様に略記する（例：「DDC12 版」）。他の分類法も同様に、現在一般的に用いられる名称および省略形（『展開分類法 (EC)』『米国議会図書館分類表 (LCC)』など）を用いる。

分類 (classification) について、「——法 (system, schema など：体系)」と「——表 (schedule, table など)」とは、日本においては歴史的にしばしば混用されている。1930～1940 年代にかけての NDC 批判においては NDC に対して「分類法」という語は適当でないという指摘もみられたが、鈴木賢祐のように初期から「分類法」と「分類表」という語を意識的に区別していた記録もある。これらの定義を概括すれば、

- 分類法……分類表および付表の集合体であることに加え、索引、使用法や記号法を備えた総合的な意味での分類体系
- 分類表……ある主題範囲の分類を示す記号および名辞を列挙した表、または付表を含めた表の集合体

と定義しうるが、本書においては、明らかに識別可能な場合や、固有名詞や引用その他特に必要な場合を除き、原則として「分類法」もしくは単に「分類」という表現を優先して用いることにする。

「分類記号 (class number または class mark)」は「分類番号」と表記することもあり、初期の NDC や関係者を含めて多くの文献で混用されているが、本書では引用に由来する部分を除いて原則的に、現在 NDC の用語として採用されている「分類記号」の表現を優先する。

また、主題や資料の並び順を示す語として「排列」「配列」(order) という語があるが、これは辞書的には同義語であり、分類法においても、また図書分類を解説する文献においてもしばしば混用されている。人間の意思によって並べる「排」と、自動的順序によって並べる「配」という本来の字義を考慮し

て、本書では引用部を除き、原則として「排列」「排架」の語を用いる。図書分類表においては主題を記号表現し「記号の順に並べる」ものであり、索引類においても「字順または音順に並べる」ものであるから、いずれも「配」の字義でも誤りではないが、特に分類表においては、記号に主題をどう配当させるかは人間の意思が強く反映されているため、「排」を優先する。

分類表およびその区分において、学問の総体（知識の宇宙）を最初に分かつ第一の区分については、分類法によって「主類」「類」「門」「主クラス」「メインクラス」などのように呼ぶが、本文では原則として「メインクラス」と統一的に表記する。

十進分類法において、メインクラスに次いで 00/99 の 2 桁の記号で表される第二の区分（100 区分）、000/999 の 3 桁である第三の区分（1,000 区分）はそれぞれの分類法で呼称が異なるが、本文の説明においては「第 2 次区分」「第 3 次区分」のように示す。

上の例にも示すように分類記号の範囲を示す際に、「/」を用いることがある（例：160/190）。これは NDC の「範囲項目」において用いられている用法と同じで、この記号範囲に属する下位区分をも含むことを意味する。すなわち「160/190」とした場合、160.4 や 171, 184.9, そして 199.8 までも含み、一般的な文法で用いられる「160~190」とは異なる（この表記だと、190 までは含みが 190.1 以降を含みえない表現となる）。他方、単純に記号の範囲を示す場合に「~」を用いることもある（例：160~199）。この場合も、199 の細目以下の下位区分（例：199.8 や、補助表によって生成される記号）まで範囲に含まれる。

その他、NDC 固有の用語については、各版に対する言及部分においては原則として当時の名称を用いるが、他版との比較のために、現在の NDC の用語にあわせた用語を適宜用いる。例として、要約表（分類表本体に先行して掲載される、最初の 10 区分・100 区分・1,000 区分の 3 表）のうち特に前者 2 表はしばしば名前が変わったが、それぞれを 10 区分の「第 1 次区分表」、100 区分の「第 2 次区分表」、1,000 区分の「第 3 次区分表」と補足的に示す。

その他、本書で扱う図書分類に関する専門用語については必要に応じて、当該箇所において概説する。

新版
日本十進分類法の成立と展開

もくじ

はじめに	i
本書の構成	v

第1章 日本十進分類法の成立前夜 ————— 1

1. 近代図書分類法の登場	1
2. 日本における近代図書分類法の発展	22
3. 十進的分類法の普及と標準分類法の待望	33
4. 森清と間宮不二雄，青年図書館員連盟	49
▶コラム1 森清の歩いた大阪：居住地編	63
▶コラム2 森清の歩いた大阪：勤務地編	64

第2章 日本十進分類法の成立 ————— 65

1. 和洋圖書共用十進分類表案（1928年）	66
2. 日本十進分類法 第1版（1929年）	82
3. 第1版への反応と実用	89
4. NDC と同時期の一般分類法	100
5. 標準分類表論争	106
6. NDC 刊行後の森	117

第3章 日本十進分類法の発展 ————— 119

1. 森とNDCの再出発	120
2. 日本十進分類法 訂正増補第2版（1931年）	121
3. 日本十進分類法 訂正増補第3版（1935年）	145
4. 日本十進分類法 訂正増補第4版（1939年）	154
5. 日本十進分類法 訂正増補第5版（1942年）	165
6. 戦禍による支援基盤の崩壊から復興へ	181
7. NDC の復刊（1947～1949年）	185

▶コラム3 毛利宮彦と NDC の「IF」 192

第4章 日本十進分類法の標準化 ————— 193

1. 終戦直後の動静 193
2. 『学校図書館の手引』と NDC 198
3. 分類委員会の設置と改訂継承 222

▶コラム4 金森徳次郎と毛利宮彦 248

第5章 日本十進分類法の確立 ————— 249

1. 日本十進分類法 新訂案（1949 年） 250
2. 日本十進分類法 新訂 6 版（1950 年） 256
3. 日本十進分類法 新訂 6-A 版（1951 年） 264
4. 日本十進分類法 新訂 7 版（1961 年） 279
5. 日本十進分類法 新訂 8 版（1978 年） 309
6. 次世代への継承 323

▶コラム5 戦後 NDC 装丁をめぐるあれこれ 328

第6章 日本十進分類法の継承 ————— 329

1. 森の引退後 329
2. 日本十進分類法 新訂 9 版（1995 年） 332
3. 日本十進分類法 新訂 10 版（2014 年） 356
4. NDC90 周年以後 392

▶コラム6 本表以外からの「手がかり」 398

おわりに 399

関連年表（1871-2026） 403

NDC 第2次区分表 419

データ版 NDC（MRDF およびリンクトデータ）の構造 431

参考・関連文献一覧 439

索引 465

第 1 章

日本十進分類法の成立前夜

日本十進分類法（NDC）は 1929（昭和 4）年に第 1 版が刊行されたが、その原案は若き日の森清が先達の分類研究者たちと接し、その薫陶を受けることで培われて発表に至ったものである。

本章では、森がいかにして NDC の根幹を考えるに至ったか、当時の日本の図書分類の状況のみならず、そこに大きな影響を及ぼした西洋図書分類法の、特に西洋の大きな流れを追うことから始める。

1. 近代図書分類法の登場

図書分類の歴史を考える上において、その重要な転換点はいくつか挙げられるが、その中でも特に大きなものはフランス、マゼラン図書館（La bibliothèque Mazarine）の司書ノーデ（Gabriel Naudé, 1600-1653）の著書“*Advis pour dresser une bibliothèque*”（『図書館設立のための助言』, 1627 年）¹において示された「図書館のための分類」の考案であったといえよう。

ノーデは同書第 7 章「*L'ordre qu'il conuient leur donner*（図書の配備にふさわしい秩序）」において「資料をどこに置くべきか」という点から、分類の本質についてこう言及している。

ここに置かれる本は、必要に応じて利用可能となっていなければならないという理由から、それなしには、われわれの探求が目的を失い、労苦が無駄になってしまうのです。しかし、主題にしたがって本が分類されるか、あるいは、特別な場所に置かれている本を容易に探しうるような何らかの

1 文献 c30：ノーデ『図書館設立のための助言』（2006）：p.71 より（藤野寛之訳）。

手だてがなければ、それは不可能なのです。さらに、こうした秩序と配置なしには、どのような量の図書コレクションでも、それが5万冊であっても、図書館の名に値しないと断言いたします。

ここでは主題を下位区分も用いて体系的に分類することや、資料の形態や受入時期などとも関連させ、排列 (ordre : 英 order : 順序) に関していくつかの工夫と助言が示されている。

しかし、まだこの時点の図書分類は分類表のように「形」として示されるものではなく、あくまで「考え方」としての分類 (区分) を示すものであった。

図書分類前史 (中世以前)

それより前の時代は、図書館利用者もきわめて限定的であったため、図書を目録上で主題ごとにまとめて記録するために書誌的分类が用いられていた。その歴史は紀元前3世紀頃のアレクサンドリア図書館の司書カリマコス (Callimachus, 310?B.C.-240B.C.) による目録 “Pinakes” (『ピナケス』) における分類まで遡ることができる。ここでは写本を詩文 (韻文) と散文とに分け、詩文は叙事篇・悲歌調篇・短歌調篇・歌謡調篇・悲劇篇・喜劇篇に、散文は法律篇・哲学篇・修辞学篇・史学篇・医学篇・雑篇にそれぞれ分けたといわれる。

さらにそれ以前、紀元前7世紀のアッシュールバニパル王 (Ashurbanipal, 在位 668B.C.-627B.C.) のニネヴェ宮殿でも既に、粘土板文書をその記述内容や形式によって神学・魔術・医学・文学などのように仕分けていたことが知られている。つまり物理的には、図書やその目録、そして図書館そのものの誕生とほぼ時を同じくして「図書の分類」という概念自体が存在していたことになる。

一方「知の分類」を最初に成立させたのはアリストテレス (Aristotle, 384B.C.-322B.C.) であるといわれる。アリストテレスは論理学のもと、学問を「理論」 (Theoretical Philosophy : 自然学・形而上学), 「実践」 (Practical Philosophy : 政治学・倫理学), 「制作」 (Poetical Philosophy : 詩学) に三分し、その下位にそれぞれの学問を配置した。なお「論理学」はこの体系内には位置づけられず、「あらゆる科学の序論」として位置づけたといわれる。そしてこの考えは後世、ウァロ (Marcus Terentius Varro, 116B.C.-27B.C.) やプリニウス (Gaius Plinius Secundus, 23-79) によって、学問の分類や博物学につながる基礎を築いた。

東洋においては前漢の時代、劉歆^{りゅうきん} (32?BC-23AD.) の編纂による総合目録『七略』(紀元前6年)における、集・六芸・諸子・詩賦・兵書・術数・方技という七部の分類があった。この漢籍の分類はやがて晋の時代、荀勗^{じゆんきょく} (?-289) による『中經新簿』で用いられた「四部分類」の形に至るように発展をかさね、7世紀・初唐の『隋書』で経部・史部・子部・集部の四部分類が成立した。中国では古代から中世に至り、『七略』から『漢書』の流れを汲む七部の分類と、四部分類が多少内容を変えつつも用いられてきたが、特に四部分類は18世紀の一大叢書『四庫全書』にも用いられ、近世以降、現代でもまだ実用される分類となった。

イスラム圏では10世紀後半、シーア派ムスリムの学者イブン・アン＝ナディーム (Ibn al-Nadim, 932?-990) が“Kitāb al-Fihrist” (『目録の書』^{ファイフリスト}, 988年頃) において、書物を10章に区分した。この分類は『ピナクス』の影響を受けたものともいわれているが、この分類がイスラム圏の図書分類の基礎となった。17世紀にはオスマン帝国の学者キヤーティプ・チェレビー (Kâtip Çelebi, 1609-1657) が“Kashf al-zunūn ‘an asāmī al-kutub wa-al-funūn” (『諸書名と諸学問についての疑問の探求』) において、このイブン・アン＝ナディームの分類をもとに書誌を分類している。

学問の体系化

中世の西洋では大学の登場によって学問や知識の体系化が進んだ。その中でもゲスナー (Conrad Gesner, 1516-1565) の“Bibliotheca Universalis” (『世界書誌』, 1545年) における21分野の分類は、図書(の目録)のための分類として大きな転換点となった。

また、図書に対するものではないが、知の体系化としての分類に大きな変革をもたらしたのは、イギリスの哲学者ベーコン (Francis Bacon, 1561-1626) の“The Advancement of Learning” (『学問の進歩』, 1605年)²である。ベーコンは学問をまず人間(の知力)による区分と神(の啓示)による区分とに分け、前者について歴史・詩・哲学に三分、さらにそれぞれの下位を段階的に区分するこ

2 文献c25: ベーコン『学問の進歩』(1974).

とで学問を体系づけた。このベーコンの学問分類は後世、図書分類以外にもさまざまな分類の根幹をなすこととなる。

その後、さらに体系化された学問の集大成としてディドロ (Denis Diderot, 1713-1784) とダランベール (Jean Le Rond d'Alembert, 1717-1783) らによる“L'Encyclopédie” (『百科全書』, 1751-1772 年) や、リンネ (Carl von Linné, 1707-1778) の“Systema Naturae” (『自然の体系』, 1735 年) における分類学などがそれぞれ著され、分類体系はより学術的に整理されていった。

冒頭に示したノーデの提言 (1627 年) は、資料の配置や順序について述べたものであったが、図書館は「容易に探しうるような何らかの手だて」として、まず書誌上で図書を分類することを求められてきたのである。

ノーデの後、書誌分類を「分類表」の形式として実際に体系づけたのは、フランスの書誌学者ブリュネ (Jacques-Charles Brunet, 1780-1867) であり、著作“Manuel du libraire et de l'amateur de livres” (『書店および愛書家のためのマニュアル』, 1810 年) における分類、通称「フレンチ・システム」であったといわれる。このブリュネの分類は、ノーデが並べ立てた主題の分類をもとにまず五つのクラスに分け、その下位をそれぞれ 5~10 の下位クラスに体系づけて分類したものであった。

このベーコンやブリュネの分類は、当時の西欧諸国のさまざまな図書分類に影響を与えた。その中でも最大級のものは大英博物館図書館の分類 (1836 年頃) である。そして、ベーコンの学問体系はその後の図書分類、特にハリスやデューイの分類法にも援用され、また、日本においても東京書籍館の六門分類は、ブリュネの影響を受けていたといわれている (本章 2 参照)。

このように欧米の図書分類法はベーコンとブリュネの影響が色濃く後世にまで影響したが、その源流は古代ギリシアまで遡ることになる。

公共図書館の登場と書架分類

19 世紀になるとアメリカをはじめ、公共図書館が登場した。それまでの図書館は閉架式が中心であり、限定された利用者が書誌分類をもとに蔵書を検索・請求していたのに対し、開架式の図書館において書誌学的な知識・経験を持たない利用者に資料を提示・提供するためには、図書を書架上に物理的に排

列する役割を担う機能が分類に求められるようになっていた。

こうしてイギリスのエドワーズ (Edward Edwards, 1812-1886) による分類 (1859 年) や、ブラウン (James Duff Brown, 1862-1914) とクイン (John Henry Quinn, 1860-1941) による “Quinn-Brown Classification” (『クイン・ブラウン分類法』, 1894 年) をはじめ、いくつかの分類が考案された。

そして、今日の一般的な図書分類法のような「記号を伴った図書分類表」は 1870 年、アメリカ・セントルイスパブリックスクール図書館のハリス (William Torrey Harris, 1835-1909) が、ベーコンの学問体系を拠りどころとした図書分類法を考案したことにはじまる³。

ハリスはベーコンの学問体系の主題順を、ベーコンの示した配置の逆順に置く「逆ベーコン式 (Inverted Baconian system)」によって、まず A～D の 4 区分 (A Science, B Art, C History, D Appendix) に大別し、その下を全部で 19 のクラスに区分した (本章 2, 表 1-11 も参照)。

ハリスは、1～99 の記号 (番号) に詳細なクラスを割り当てて約 100 項目の分類表を形成した。十進分類ではないので記号の桁と概念の階層は一致していないが、番号だけでなく、英字を用いて下位区分を展開している。表 1-1 は、1932 (昭和 7) 年に日本で紹介された表をもとに作成したものであり、原典と比較するとかなり要約されたものであるが、日本への影響と、クラスの排列順比較の参考として掲載した。

この分類は主にハリスの管理下にある学校で採用されたとされるが、それ以外にも米国内でいくつかの採用があったという。中でも、イリノイ州のピオリア図書館では、これを採用した上、1896 年に改訂している⁴。

十進分類法の誕生

そしてさらに大きな、図書分類の歴史上最大ともいうべき転換点は 1876 年、アメリカのメルヴィル・デューイ (Melvil Dewey, 1851-1931) が発表した “A Classification and Subject Index for Cataloguing and Arranging the

3 文献 c1 : Harris “Book Classification” (1870).

4 文献 c8 : 乙部泉三郎『デュウイ十進分類法の解説及応用指針』(1927) : p25-34.

え

4. 森清と間宮不二雄，青年図書館員連盟

NDCの「原編者」として知られる森清（1906-1990）は，自身のことを「趣味的に何の知識も経験もないのに自分の本や雑誌などを学校の教科目に分けたり，記録を作ってきた」⁷⁴「私は子供の頃から“物を仕分したり記録をとる”ことを愉しみとする妙なクセがあり，教科目分類や大阪府立の分類を参考にして一つの表を作ったりしていた」⁷⁵と語っている。そのエピソードは朝日新聞で

73 文献 d241：もりきよし『NDC 入門』（1982）：p.30 より。

74 文献 b27：もり・きよし『司書 55 年の思い出』（1991）：p.12 より。

75 文献 b15-1：もり・きよし「思い出は，感謝のなかで」（1971）：p.33 より。

も採りあげられており、森の談話として「本を教科書、辞書、参考書などと分類してよろこんでいたし、最初に図書館へ行ったのも、そこではどんなふうに本が整理されているか知りたかったからだ」とあり、記者は森について「生まれながらに“分類”の素養があったわけだ」と次いでいる⁷⁶。

この記事をはじめ今日、一般にNDCに対する認識は「森清が考案・作成したもの」であり、森こそが「画期的な分類の考案者」ととらえられているが、NDCが「森の個人著作」といわれる時代にあってもそのすべてが森の独創であったわけではなく、その誕生の経緯から発展に至るまで実に数多くの人物がこれに影響・関与している。衛藤利夫による十進分類法（を模倣した分類表）への批判に森が影響を受けたこともその一つだが、なによりNDCへの最大の寄与者として、間宮不二雄（1890-1970）の存在を欠かすことはできない。

間宮は今日、図書館用品店「間宮商店」の創業者にして「青年図書館員連盟」を結成した人物として語られることが多い。しかしながら、間宮は実業家としてだけではなく、彼もまた少年時代から分類に強い関心と問題意識をもったひとりの研究者であって、若い図書館員たちに対する単なるパトロンという立場にとどまらない。間宮の分類に対する見識と熱意がなければ、森がNDCを発表する機会は訪れなかったと思われる。

研究者としての間宮の業績には『図書館辞典：歐和對譯』（1925年・文友堂書店）やDDC12版Introductionの翻訳である『DEWEY十進分類法導言』（1930年）⁷⁷など多くの編著書・訳書もある。さらに間宮は用語用字の問題にも関心が強く、中華民国の図書館学者である杜定友とも協力して「図書館」を一字で表す「としょかん圖」の字を考案したこともあり⁷⁸、また「カタログ（catalogue）」に対する当て字として「かたろぐ型録」という語を初めて使用したともいわれている⁷⁹。

76 文献 b6：「生来“分類”が大好き 国立国会図書館司書 森清氏（本とともに）」（1960）。

77 文献 c17：Dewey『DEWEY十進分類法導言』（1930）。

78 文献 d94：間宮不二雄「「圖」ノ文字ニ就イテ」（1943）。

79 文献 b8-1：井筒静之助「間宮さんとお化け屋敷」（1964）。

文中に、以下の記述がある。

私が初めて、「丸善文房具型録」—この型録と云うあて字はたしか間宮さんが大阪で使い初めと思う—約百頁、四六倍判を作った時、一般からは割合好評で、いささかよい気持ちで居たら「印刷屋の活字の見本帳みたいだね」と、痛い批判をしたのも間宮さん。

さらにもう一つ，間宮の図書館以外の分野における最大の関心・研究対象に「ローマ字研究」があり，これこそが森との接点となった。

間宮不二雄と分類法

間宮不二雄は1890（明治23）年，東京市本郷区本郷元町（現在の文京区本郷）に生まれた^{80, 81}。1903年，12歳のときに丸善書籍部の見習い生に入社し，1907年，18歳の時に丸善京都支店開店のために大阪支店に転勤した。この時期，業務用として独自の分類表を作成している。

明治44年（1911）当時丸善 KK 大阪支店在勤中，同店で取扱う内外の図書，それらの印刷目録，並びに顧客に送る Maruzen's Announcements の名簿編成に一貫性を与えるため，一つの分類表を編成した。これはタイプライターで正副三通を作り，それぞれに日本語の名辞を添記したもので，題して：

“Classification: 8 classes; adopted to the Circulation dept. of the Maruzen Co., Osaka Branch. Osaka: Mamiya, 1911. 50p. 20cm”

というのであった。本表はその後，同社の京都及び福岡両支店にも利用せしめるため，副本各一冊を分ち，手元には一冊だけが残されていたのであるが，昭和20年3月14日（1945）米空軍の爆撃のため，一切が烏有に帰され，その際この地上にただ一冊しか残存していなかった本表も，犠牲となり，今は『図書館学及書誌学関係文献合同目録』の片隅に，僅かに書名が記録されているだけとなった。この分類表編成には DC の6版（？）で，小豆色総革三方金装釘のものを参考にしたことを記憶している。

この回想⁸²からは，間宮自身が DDC の影響を受けており，かつ図書分類法の構築に強い関心を寄せていたことが窺える。この分類については間宮の自伝にも形態について詳細に記されており，また，「主題の ABC 順索引を附したものと」記されている⁸³。当時の図書館分類が索引を十分に備えていなかった

80 文献 b5：間宮不二雄『図書館と人生』：p.31 より。

81 文献 b14：間宮不二雄『圖とわが生涯 前期』：p.107 より。
ここでは「本郷区元町」とある。

82 文献 d168：間宮不二雄「日本十進分類法普及に想う」（1959）。

ことを鑑みれば、間宮が独自に DDC に学んだことが活かされている。

この間宮の分類表（便宜的に「間宮案」という）については後年、小野則秋が『図書館界』に寄せた間宮の評伝⁸⁴の中で「タイプライター印書 50 頁の分類表」と記している。

そして、間宮案と DDC の関わりについては、1930 年に間宮が訳した『十進分類法導言』の訳者序文⁸⁵にもう少し詳細な記述があり、「1911 年ニ出来タ私ノ分類表ト Dewey D.C ノ第 12 版トオ比ベルト、其ノ基礎項目ニ於テサエモ次ノ如キ相違ガアル」と述べ、DDC12 版のメインクラスの配置と間宮案（A／H の八つのメインクラス）との比較も行っている（表 1-20）。

ここで興味深いのは、間宮案はメインクラスを 8 区分としながら八門分類法（表 1-12）とは相似していないことと、DDC12 版ではデューイが考案し提唱した表記による語（Filosofy, Filology）が見られることである。

表 1-20 間宮案と DDC のメインクラス比較⁸⁶

間 宮 案 1911		D.C. 12 ed. 1927	
ナシ		000	General Works
A	Philosophy *	100	Filosofy
B	Sociology	200	Religion
C	Philology	300	Sociology
D	Natural Science	400	Filology
E	Useful Arts	500	Pure Science
F	Fine Arts	600	Useful Arts
G	History	700	Fine Arts
H	Literature	800	Literature
ナシ		900	History

* Philosophy ノナカニ Religion オ含マシメ、General works ナルモノニワ全クナイ。辞書類ワ大部分 B ノ言語學中ニ入レタ。但シ特殊科學ノ辭書ワ各々其特殊ノ類ニ入レタノデアッタ。

83 文献 b14：間宮 前掲 81: p.117 より。

84 文献 b7：小野則秋「藍綬褒章の人 間宮不二雄を語る」（1961）。

85 文献 c17：Dewey 前掲 77: p.8 より。

86 文献 c17：Dewey 前掲 77: p.9 より。

この綴字法は合理主義者だったデューイの発案によるもので、発音しない文字を省略やより発音に近い文字に置換することで簡略化する *Simpler Speling* (*Simpler spelin* とも、正確には *Simplified Spelling*) による表記である。これによれば *Philosophy* は *Filosofy*、*Philology* は *Filology* と表記し、この綴字法を採用した DDC12 版 (11・13 版も) の標題は “*Decimal Clasification and Relativ Index*” と印字されている (本来は *Classification* と *Relative*)。

この独特の綴りからは、*Catalogue* を *Catalog* と略したものが現在も通用する英単語として定着したという例も生まれたものの、間宮はその大部分は「英語と日本語」という壁だけでなく、デューイの文体それ自体の難解さとあわせて DDC の理解と翻訳を妨げたと語り、セイヤーズさえも綴字に対して「悪口ニ近キ程ノ酷評」をしたほどであったという⁸⁷。なお、デューイ自身はこれについて DDC12 版巻頭において “*Speling*” と注意書きをした上、*Introduction* の最後に詳細な解説を設け「言語学者も支持するところである」と述べている⁸⁸。

間宮商店はこの DDC12 版の輸入・販売について日本総代理店となっていた。価格は 30.00 円であり、現在の物価に換算すれば 10 万円を超えられる。高額であったが、間宮の序説邦訳の刊行もあってか国内に相当数普及したとみられ、12 版は前後の他版に比べ、国内に現存しているものが多い。

なお上の回想において、間宮案の策定にあたって参考にしたのは「DC の 6 版 (?)」と書かれていた点について、間宮自身が『十進分類法導言』の訳者序文において次のように記しており、5 版であった可能性が高い。

當時 America カラ取寄セタ原書ノ形状ワ現今ノモノニ比スルト小形デ又薄イモノデ、總モロッコ革デ表装サレ、三方小口ワ色附ニナッテイタ第 5 版カト記憶シテ居ル。

間宮商店

間宮は京都から東京本店に戻った翌年の 1915 (大正 4) 年に丸善を退社、ア

87 文献 c17 : Dewey 前掲 77: p.11 より。

88 文献 c7 : Dewey “*Decimal Clasification and Relativ Index Ed.12 rev. and enl.*” (1927) : p.49-63.

メリカ留学を経て1916年東京・銀座の黒沢商店に就職し、事務機器などの販売に従事した。

1921年、間宮は黒沢商店を退職して、大阪市北区本庄中野町（現在の北区本庄東）で「M・フヤセ商会」を創業し、タイプライターや計算機、目録カードを主に扱った。この屋号は、間宮不二雄と丸善時代の同僚で、友人でもあった玉井弥平、井上清太郎とともに仕事をしたい、という間宮の願望からつけたものであった⁸⁹。この願いが叶うことはなかったが、同年のうちに大阪市西区江戸堀に事務所を借りて事業拡張に至っている。この頃から間宮は図書館用品の製造販売を主たる事業にすることを考えており、この構想をもとに合資会社「間宮商店」の設立に至る。

1922年、間宮は本格的に図書館用品の取り扱いに着手した。カード裁断機や印刷機などを置くには中野本庄の自宅と江戸堀の事務所では不便だったため、大阪市北区木幡町21（現在の北区西天満3丁目）に移転し、合資会社間宮商店を創業した。

官報によれば設立年月日は「大正十二年二月十八日」⁹⁰とある。間宮の自伝『圖とわが生涯』では「大正12年（1923）合資会社間宮商店を結成し、私がその無限責任社員として実行に移った」とあり、年については官報の記述とも一致するが⁹¹、別の自伝『図書館と人生』の略歴においては1922年8月に「大阪市北区木幡町に移転、同時に合資会社間宮商店を結成、無限責任社員に就任」とされる⁹²。また、間宮の古稀記念論文集に森が寄せた年譜では1922年に「12月、大阪市北区木幡町に移転し、合資会社・間宮商店を創業し、図書館用品の製造販売を専業とする。会社設立には、旧友・田村啓造、島野亭似及び義父・倉島庄太郎氏の協力を得た」と書かれており、実態としては1922年8月ないし12月から木幡町にて間宮商店としての業務を開始したと考えられる。

89 文献 b14：間宮 前掲 81: p.160.

90 文献 f1：『官報』（1923）：p.12.

91 文献 b14：間宮 前掲 81: p.163-164 より.

92 文献 b5：間宮 前掲 80: p.288.

森の少年期

森清は1906（明治38）年8月25日，大阪市東区住吉町14（現在の中央区材木町2丁目）に紙細工・玩具を生業とする父・豊太郎と母・モトの長男として生まれた。本籍は父の出身地である岡山県邑久郡豊村（現在の岡山市東区西大寺五明）であり，森自身もしばしば岡山を「郷里」と記しているが，森は幼少期から青年期までの大半を大阪で過ごした。そして森が物心つく前の時期に家は大阪市南区難波東神田（現在の浪速区元町3丁目）に転居しており，その立地については森の自伝において詳細な記述がある（コラム1参照）。

森は1913（大正2）年に難波第四尋常小学校に入学，1919年に難波第一小学校高等科に編入した。そしてこの1919年8月，帝国ローマ字倶楽部が主催する夏期ローマ字学校に参加し，講師を務めた山田房一（1901-1986）⁹³に学んで国字問題に関心を持つようになった。山田と森の年齢差は5歳であり，森と出会った当時の山田もまた若かったが，のちにローマ字研究の第一人者となる人物である。

後年の視点から見れば，森と山田との出会いは，NDC誕生につながる最初の転換点であったといえる。この講習はわずか5日間のことだったが，1920年，大阪市立実業学校商業本科に入学した森は，「ふとしたことから」山田の私宅に招かれて個人指導を受けるほどに交流を深めた⁹⁴。そして山田の紹介によって森は翌1921年3月に創立した財団法人帝国ローマ字倶楽部の月例会に参加をするようになった。

この「帝国ローマ字倶楽部」は，1905年に結成された「ローマ字ひろめ会」の大阪支部として，大阪大学の医学博士・桜根孝之進（1870-1950）が主宰する会であった。そしてこの会の理事は当時住友銀行の支店長で，のちに外来語やタイプライターに関する著作を数多く残す加茂正一（1891-1974）と，黒沢商店を退職して大阪に移った間宮不二雄であった。この桜根に間宮を紹介したもの

93 文献 f6：国立国語研究所編「国語関係者名簿（昭和59年12月末現在）」（1985）：p.(160) - (161).

94 文献 d218：もり・きよし「NDC五十年雑記」（1979）：p.393より。

コラム 1

森清の歩いた大阪：居住地編

森清の生家は、大阪の東区住吉町（現・中央区材木町）、現在「まっちゃまち」という愛称で呼ばれる松屋町筋の通りに面した場所です。少し歩けば菓子問屋や玩具問屋などが点在しています。この一帯は、NHK 連続テレビ小説や大河ドラマで話題になった五代友厚らの像のある大阪商工会議所前（府道 102 号線）を南に 600 メートル、徒歩 10 分という場所です。

森家跡地の南側で現在特に目につくのは人形店ですが、周辺の路地に入ると、紙問屋や卸売店もよく見かけます。そして、森家の当時の家業もまた紙製品問屋でした。周囲の建物はすっかり建て替わっていても、街は当時の名残を残しているのでしょうか。

なお森の自伝では、物心つく前後に転居をしたためほとんど記憶もなかったそうで、この界限についてはほとんど記載はありません。

森が5～6歳の頃の転居先は南区・難波東神田（現・浪速区元町）でした。難波八坂神社から近く、当時は関西本線（現在の JR 大和路線）の踏切に近い、職人の家が立ち並ぶ路地でした。自伝では、森家のある路地について「私の家の右隣りはメリヤス問屋、鷹職、油屋、綿屋、設計事務所、また向い側はゲタ屋、屋根職、在郷軍人会事務所、家具職、ブリキ屋、唐木細工屋、俵屋など、どちらかといえば職人や小アキンドであった」という詳細な記述があります。

ですが、現在この一帯は南北に広がる長細い公園（広場）になっていて、当時の街並みを想像することはできません。それは、1945 年 3 月の大阪大空襲で米軍の照準点となったのがまさにこの一帯だったためです。かつて踏切があった線路も現在は地下に移ったため、公園になったと思われます。

森は大阪市難波第四尋常小学校を経て、1919（大正 8）年に難波第一小学校高等科に編入しました（どちらも現在の大阪市立難波元町小学校）。そして、この年夏期ローマ字学校に参加したことで山田房一と出会い、その 2 年後、間宮不二雄とめぐりあうことにつながったのです。

第2章

日本十進分類法の成立

本章では、NDCの原案が発表された1928（昭和3）年、NDC第1版が刊行された1929年およびそれらへの反応から、「標準分類表論争」が展開された1930年の期間を主に扱う。

1926（大正15）年12月25日に大正天皇が崩御し、皇太子裕仁（昭和天皇）が即位して昭和に改元された。当時の日本は日露戦争（1904-1905年）の戦勝後、ロシアの租借地であった関東州（現在の中国・遼寧省）を引き継ぎ、南満州鉄道（満鉄）をはじめとした経済活動に日本が関与した。さらにその背景として、1900（明治33）年の義和団事件の賠償金を事業基金として始まった対支文化事業（東方文化事業）の一環として、20世紀初頭から日本の図書館人が大陸に赴任していた。その一例として、東京帝大の司書であった衛藤利夫は1919年に満鉄大連図書館、そして1922年には満鉄奉天図書館長に就いている。

しかしながら、関東州と満鉄の防衛のため設置された関東都督府（のちに関東総督府）は民政を司る関東庁と、軍事を司る関東軍とに再編され、関東軍の謀略がやがて満州事変（1931年）を経て、日中戦争（1937-1945）へとつながっていく。

1928年はまさにその端緒となる張作霖爆殺事件が奉天市（現在の瀋陽市）近郊で発生した時期であった（6月4日）。他方、1929年10月のウォール街での株価大暴落に端を発した世界恐慌は日本にも波及し、1930年から昭和恐慌に陥った。

まだ戦争・紛争までには至っていないが、その萌芽となる出来事が次々と起こり始めたのがこの時代である。

1. 和洋圖書共用十進分類表案（1928年）

森清が幼少期から分類に関心を持っていたのは既に述べたとおりで、独自の分類を趣味として作っていたが、間宮商店に入ってからではDDCや多くの文献や研究者と接し、分類に対する理解を深めていた。森は次のように回想する¹。

東京駐在員時代は乙部泉三郎氏からDDCについて教えられ、また間宮文庫を整理する傍ら従来 of 習作を改め、衛藤利夫（奉天図）氏の論文に刺激を受け一つの試案を作成し所持していた。もちろん発表する意図はなく、私の自慰に過ぎなかった。

乙部はDDCのみならず分類全般について造詣が深い人物であり、また森は衛藤の『圖書分類ノ論理的原則』²からも影響を受けていた。同じように業務とDDCの経験から分類を自作した間宮の場合は「業務に使うこと」を目的としたものであったが、森の分類はあくまで私的なものであった。だが間宮は森に、その試案の発表を強く勧めた³。

私にとって分類表の試作は、あくまで個人的な趣味ないし愉しみであって少年の頃から試みていた。したがって図書館の実用に供するつもりはなく、公表など考えてもいなかったわけである。本を仕分けることに関心があった私は、初め教科目による分類表を、のち図書館で使用していた表に倣って15部門分類表（1922）などを作っては、また改めるというノートにすぎなかった。間宮文庫の整理でDDC（12版）を使って分類するうちに、デシマル・システムの妙味に惹かれて十進法による試案を作成していた次第である。それを間宮先生の強い要請で「圖研究」に発表し、つづいて「索引」を寄稿した。

1 文献 b27：もり・きよし『司書 55 年の思い出』（1991）：p.12 より。

2 文献 c6：衛藤利夫『圖書分類ノ論理的原則』（1926）。

3 文献 d218：もり・きよし「NDC 五十年雑記」（1979）：p.391 より。

NDC 原案の発表

こうして森は 1928 年 4 月、『圖研究』1 卷 2 号において「和洋圖書共用十進分類表案」⁴を発表し、続く 7 月、同 3 号にも案の続きとして相關索引等⁵を掲載した。以後本書ではこの二つを総称して「NDC 原案」または単に「原案」と呼び、1 卷 2 号掲載のもの（主として序文および分類表）を「原案前半」、3 号掲載のもの（主として索引および付表群）を「原案後半」と呼ぶ。

『圖研究』は『図書館雑誌』より紙面の小さい A5 判であったとはいえ、原案は前半と後半を併せて 88 ページにも及ぶ量である。しかも既に約 2,900 語の相關索引を備えており、十分実用可能な詳細度であったといえる。

原案の構成は DDC の影響が色濃い。しかしこれは DDC の「本表」つまり体系だけを模倣し、数字による十進記号を用いて主題を並び連ねたということではなく、助記性や相關索引（Relative Index）など DDC が評価されるに至った要素の数々を含めて「模倣」したものである。これこそ森が序文でいうところの「似而非」十進分類表とは決定的に「似て非なる」点であろう。

原案前半

原案前半は 41 ページにわたっており、その冒頭の 5 ページを費やしてこの分類表案成立に至る経緯を説明し（章見出しがないため、本書では便宜的に「序文」という）、5 ページ目の半分に「基礎項目」（現在の NDC における「第 1 次区分表（類目表）」に相当）、続く見開き 2 ページで「第一要目表」（「第 2 次区分表（綱目表）」に相当）を載せ、残り 33 ページが「細目表」、最後の 1 ページが「助記表」（おおむね「補助表」に相当）である。

■序文

森は NDC の嚆矢として、次のように標準圖書分類法の必要について述べた。

4 文献 a1：森清「和洋圖書共用十進分類表案」（1928）。なお、NDC9 版「解説」xii ページでは「和洋圖書共用十進分類表案」と誤記されており、図書館学テキスト等においても「和漢圖書～」あるいは「～分類法案」などと記されていることがある。

5 文献 a2：森清「和洋圖書共用十進分類表案 II 相關索引」（1928）。

コラム 6

本表以外からの「手がかり」

序文にも書いたように、本書の執筆につながった発端は、筆者がNDC旧版の古書を手に入れたことでした。どの版も貴重なものですが、実は研究のきっかけはむしろ「本表の外」にありました。

中でも特に5版には衛藤利夫へ宛てた間宮直筆の献呈文が書かれており、標題紙裏に押印された刷の番号は「2」でした。間宮が衛藤に相当な敬意を払っていたことが窺えるもので、衛藤と間宮、そしてNDCとの関係に興味を持ったことがNDC史研究の第一歩になったのでした。

また、2016年に入手した新訂6版第1分冊の刷番号は「4」で、これは鈴木賢祐の印のある旧蔵書でした。この0類図書館学のページにはびっしりと朱書での書き込みがしてあり、鈴木自身の改訂への意気込みが垣間見えました。

また、ページの「間」にも発見がありました。2版と新訂6-A版・14刷のどちらにも、発行元のはがきが挟まっていました。現在でもたまに見かける「購入者アンケート」の類といえます。

2版のはがきには、大阪・安堂寺橋通の住所と「間宮商店出版部 御中」と書かれ、裏面には「今後増補訂正等発表ノ都度御通知致マスカラ御手数デスガ下記夫々御記入ノ上郵送願イマス」との文があり、NDCを採用（実用）しているか、参考資料として購入したものか、という問いがあって、NDCの使用実績を確認するために用いていたことが窺えます。そして筆者は現在の地名ではないこの場所にも興味をもち、古地図を頼りにこの跡地を特定して訪れたのは2版の入手から8年後でした。

一方6-A版のはがきの宛先は「東京都下谷郵便局区内 社団法人日本図書館協会事業部 行」となっています。協会が上野公園内にあった当時のもので、後者には「本書購入の動機」という欄が設けられていました。

これらはいずれも、デジタルアーカイブ（たとえばNDLデジタルコレクション）では見ることのできない情報です。

このように、研究や興味のきっかけは、いたるところに潜んでいるのです。

おわりに

本書の冒頭にも記したように、本書の刊行は実際の NDC100 周年よりも若干早い。その趣旨は、本書の最後の項として掲げた、NDC100 周年記念事業の一環として世に送り出したい、というところにもかけたものでもある。

本書の刊行をもって「今日に至る NDC の歴史や経緯をすべて明らかにできた」とまで自負するものではないが、その一連の過程や出来事につき、できる限り出典を明らかにし、より深い検証を可能にすることはできたと考える。

例えばその一つが「もり・きよしが 1986 年に分類委員会を引退した」という事実である（本書 325 ページ）。NDC 史を 10 年以上にわたって研究している筆者にとっては当たり前のように「1986 年」と記憶しているものの、もりの自伝や追悼文、当時の『図書館雑誌』の各種記録（ニュースや協会通信、理事会記録など）を見ても、引退した事実そのものに言及した「典拠」はない。これは、新訂 9 版「解説」の NDC 沿革においてひっそりと言及されているだけのようである。もりに近い立場にあった石山による文であるから信憑性は高いだろうが、「間宮商店の創業時期」など、当事者の自伝・評伝においてすらも記述があいまいなこともある（本書 53 ページ）。

このような一つひとつの出来事に対し、できるだけ複数の出典を集めることができれば、より確度は上がるし、本書で出典を辿れるようにしただけでも意義はあると考えている。既に NDC の旧版に関わった多くの方々や鬼籍に入ったり、現役を退いたりしている昨今、オーラル・ヒストリー的な調査もいっそう難しくなる。

他方、10 版については筆者が当事者の末席にいることから、文献以外の情報からも書ける部分があったことはよいものの、後年、これらの多くに対する文献的な根拠はほとんど公になっていないのだから、次代の研究者にとっては本書が一次的な記録になるかもしれない。筆者があとどのくらいの期間 NDC に関与できるかはまだわからないが、これで NDC 史は「完成」というつもりはない。まだ掘り下げるべきところは、引き続き調査を重ねていきたいと思っている。

あとがきと謝辞

前著刊行の翌年、前著を対象に私立大学図書館協会の協会賞をいただくことになった。筆者は過去、2006年度にも同賞を受けているが、今回は筆者のライフワークである分類研究を対象とした受賞ということもあって、前回以上に光栄なことで受け止めた。

この受賞を筆頭に、刊行から8年の間にはさまざまなことがあったが、なによりも大きかったのは、NDC史をテーマとして博士の学位を得たことである。筆者は修士課程を経ていないが、前著や、そこに至るさまざまな研究実績をもって修士相当と認めていただくことができた。したがって、博士論文は前著で不足していた部分を補った上で、より高度な研究にする必要があった。「はじめに」でも示したように、本書には博士論文には書ききれなかったことも含んだし、その過程で学んだ「分類史に対する研究姿勢」も本書に反映させることができたと思う。

また、ISKO（国際知識組織化学会）のオンライン百科事典“IEKO（ISKO Encyclopedia of Knowledge Organization）”に、NDCの解説を英語論文として寄せる機会を得たし、これによって、いくつかの海外文献の中でNDCが言及されることが散見された。

さらに、DDCやコロソ分類法研究の世界的権威であるサティジャ氏とも面識を得た。サティジャ氏は、筆者が分類史研究だけでなくこれまでいくつかの研究をしていることに関心を寄せてくれたようで、SRFLIS（サティジャ図書館情報学研究財団）の優秀図書館員賞をいただくことになった。また、サティジャ氏とDDCの若き編集長キリオス氏の共著であるDDC研究書“A Handbook of History, Theory and Practice of the Dewey Decimal Classification”（2023年）の巻頭に、発売前書評（紹介文）を書かせていただくという稀有な機会もいただいた。

2023年5月には、思いがけずTBSラジオ「アフター6ジャンクション」（現：アフター6ジャンクション2）に出演する機会も得た。これは同年4月にゲスト出演した高倉暁大氏がNDCを話題に出したことが契機となり、当日は高倉氏（オンライン出演）とともに臨んだ。当初の企画趣旨は「図書館のお仕事」がその日の特集テーマで、その一環として分類の仕組みを紹介する、というも

のであったが、放送前のディレクターや構成作家との打ちあわせで分類に特化した特集に変更となった。そうしてNDCを概説した際に、その歴史についても数分間の紹介の時間を割くことができた。ありがたいことに、その後の番組でも折にふれて分類の話題がのぼることがある。この経験で意識したのは、「深い知識のない聞き手」にもおおよそ理解ができ、興味を惹くような、できるだけ平易で丁寧な解説であった。そこで前著をリライトする機会を得た今回、前著や博士論文の原稿を単に切り貼りして構成するのではなく、一文一文をできうる限り吟味しての再構築を試みた。その効果が本書で出ていることを願う。

本書の執筆とリライトにあたってお世話になった方々や御礼を申し上げたい方々は、枚挙に遑がない。既に前著でも多くの方々（樹村房、私大図協・分類研究分科会、日図研・情報組織化研究グループなど）や、元・日本図書館協会の松岡要さんなどを挙げさせていただいた。

今回さらに、博士論文のご指導をいただいた筑波大学の吉田右子教授をはじめ博士論文の審査をいただいた諸先生方をまず加えさせていただきたい。特に吉田先生には、論旨の展開からさまざまなテクニックを丁寧にご教授いただいた。これまで無手勝流でやってきた筆者にとって、有益で新鮮な経験であり、本書でも意識するところが多かった。また副指導や審査をいただく過程で諸先生から、NDCの歴史研究に対して「誕生」「成長」といった擬人的表現の使用することへの留意や、時代区分の設定についてご意見・ご指導をいただいた。本書においてはそれらを取り入れたもの、あるいはあえて元来の表現を用いたものなどさまざまあるが、博士論文へのご意見やご指摘は常に意識に置いて執筆に臨んだ。

次に、先に述べたIEKOやサティジャ氏とのご縁を取り持っていたいただいた元・獨協医科大学病院図書室の川村敬一さんにも感謝を申し上げたい。川村さんはファセット分類法であるBSO（Broad System of Ordering）の世界的権威であるが、筆者がTP&Dフォーラムに参加し始めた初期の頃からなにかとご助言や激励をいただくことが多かった。そして近年は特に、自身の海外でのご活躍を通じて得た知見や人脈をご紹介いただくことが増えた。川村さんからかけ

ていただいている期待にどこまで応えられているかまだ自信はないが、IEKO への執筆も SRFLIS の受賞も、筆者は川村さんに次いでそれぞれ 2 人目の日本人となることができた。

そして、筆者の分類研究の蒙を拓いてくださった分類研究分科会の歴代会員諸氏の中でも特に、元・東京理科大学図書館の光富健一さんに感謝を申し上げたい。本書の本文、特に 9 版以降は分類研究分科会や TP&D フォーラムでご縁のできた多くの先輩たちの言説のいくつかを引いたり、名を挙げたりすることはできたが、筆者がいちばん影響を受けたといえる光富さんの名前をどこにも挙げるができなかった。それは、光富さんの主たる関心が NDC よりも BC2 や DDC、UDC などにおける、ファセット分類法の理論や実践の研究に大きかったからでもある。筆者は分科会を通じて、あるいはそれを越えたさまざまなところで NDC に対する光富さんの言動から学ぶことは多かった。なによりも、光富さんの熱意を浴びなかったとしたら、TP&D フォーラムに参加することもなかったかもしれず、川村さんや、もしかしたら出会った当時の分類委員長だった金中さんとも社交辞令以上の関係は築けなかったかもしれない。そもそも、それらの延長上に樹村房さんとのご縁があったわけで、本書につながる最初の一步は、やはり光富さんとの出会いから始まっていたといえよう。

公私混同をするつもりはもちろんないので本文中でその言説に言及することはできなかったが、NDC が今後大なり小なりファセット分析の手法を取り入れるようなことがあれば、光富さんの文献の考察なしに実現することはできないであろう。

前著の本項で掲げた「より完成度の高い、次なる目標」であった NDC 通史の執筆と、その時には予想もしていなかった博士号の取得はこれで達成した。

だが、ここまできたら NDC 史研究は筆者のライフワークとして、まだまだ休むことは許されないようである。

2026 年 8 月

藤倉 恵一

[著者紹介]

藤倉 恵一（ふじくら・けいいち）

1973年生 筑波大学大学院人間総合科学学術院人間総合科学研究群情報学学位プログラム（博士後期課程）修了

文教大学付属図書館副主幹司書。博士（情報学）

日本図書館協会分類委員会委員。『日本十進分類法』新訂10版以降の改訂に従事

元・私立大学図書館協会東地区部会研究部分類研究分科会代表，元・日本図書館協会図書館の自由委員会委員 ほか

[主著]

『図書館のための個人情報保護ガイドブック』（2006年，日本図書館協会）

『日本十進分類法の成立と展開：日本の「標準」への道程1928-1949』（2018年，樹村房） ほか

[受賞歴]

2021年 SRFLIS（サティジャ図書館情報学研究財団）World Library Leaders Award for Professional Excellence-2021

2018年度，2006年度 私立大学図書館協会 協会賞

『日本十進分類法（NDC）』は2029年8月に100周年を迎えます。
日本図書館協会分類委員会では記念ロゴを作成し、100周年記念
の各種事業や刊行物に使用します。



新版 日本十進分類法の成立と展開

日本の図書館を支えた100年の道程

2018年8月25日 初版第1刷発行

2026年8月25日 新版第1刷発行

〈検印廃止〉

著 者 藤 倉 恵 一

発 行 者 大 塚 栄 一

発 行 所 株式会社 樹村房
JUSONBO

〒112-0002

東京都文京区小石川5-11-7

電 話 03-3868-7321

F A X 03-6801-5202

振 替 00190-3-93169

<https://www.jusonbo.co.jp/>

印刷・製本／亜細亜印刷株式会社

© Keiichi Fujikura 2026 Printed in Japan

ISBN978-4-88367-423-7 乱丁・落丁本は小社にてお取り替えいたします。